

レポート 11月6日（水）

「語りはじめたご本人に学ぶ～真の医療福祉倫理をもとめて～」

匿名希望のレポートです

うつ病は私自身体験しております。

不眠不休で働いていたころ、不眠ぎみではあったのに放置しているうちに進行し、受診したころには疲れ果てていました。

診断名を言われた時は認めることができませんでした。

何か違うと、わたしは、うつ病なんかになるような人間ではないと思っていました。

そして、体重がみるみる落ち、目の色が死に、時には家の中で暴れるようなこともありました。症状が自覚できると、また違った意味で「わたしはうつ病ではない」という受け止めることができませんでした。

いま地元をはなれ、職場を離れたのは、「うつ病の〇〇さん」を知っている人から離れたかったからです。

知っている人の中にいると、いつまでもそういう目で見られているのではないかという気持ちになります。レッテルを貼られているような気持ちになり、離れることで、うつ病を断ち切ろうと思っていました。

でも、うつ病の私自身を自分自身が受け止めて、共に生きていくことが必要なのではないかと、時折感じます。

自分を認めてほしい、自分の存在価値は何か、病気で休職している間はずっと考えていました。

もしかしたらあの時より今のほうが、その気持ちが強く、壊れそうです。

念願の「自分がうつ病であったことを知らない」環境で働いているので、このようにカミングアウトはためらいました。

文章にもなっておりません。

しかし先生の講義を聞いて、あのころからの自分自身を振り返ることができましたし、現在の自分自身の本音や今後について、考えなければならぬなど思い、両先生へのお手紙というかたちで書かせていただきました。

大熊由紀子先生、澤登先生、ありがとうございました。